

対馬と大陸をつなぐトンボ

対馬の自然と生き物の会

境 良朗

トンボは古くは奈良時代に「秋津（あきつ）」と呼ばれていたことから、日本人には身近で親しみのある昆虫だったようです。戦国時代には多くの武将がトンボを甲冑や兜に採用しました。それはトンボが勝ち虫と言われ、縁起の良いものとされていたからです。

呼び名は「秋津」以後、その姿から「飛ぶ棒」という別名が生まれ、時代とともに音（おん）が変化していき、江戸時代になって「トンボ」に落ち着きました。漢字には「蜻蛉」が当てられ秋の季語にもなっています。

■対馬のトンボと生息環境

日本からは二〇八種のトンボが記録されています（二〇二二年現在）が、対馬にはそのおよそ五分の一にあたる四〇種ほどしか生息していません。比較的自然豊かな島だと思われる対馬ですが、これはどういうことなのでしょう？

トンボは生息環境によって大きく「止水性」のトンボと「流水性」のトンボに分けることができます。種によって幼虫期のヤゴが育つ環境の好みが違うわけです。例えば、多くの人が知っているシオカラトンボはため池や湿地、水田などの止水域、オニヤンマは河川の上り中流域や溪流、山道の側溝などの流水域が生息環境となります。ところが対馬には池沼はほとんどなく湿地も廃田跡などがごくわずか見ら

れるだけです。また流水域も山が海岸間近まで迫っている地形のため、谷筋から伸びる小溪流は無数にあるものの雨が降ると一気に増水し海に流れ込み、そのあとはすぐに干上がってしまいます。このようにトンボにとって厳しい環境が対馬トンボ相の貧弱さの原因だと考えられます。

ここでは日本では対馬だけに生息する大陸系のトンボを二種紹介したいと思います。

チョウセンゲンバイトンボ

■日本の発見

二〇二一年七月下旬、私は昆虫調査のため虫友の日下部満さんと上県町目保呂を訪れていました。この時、先着した日下部さんがゲンバイトンボの雄と思われる個体を採集していました。さっそく周辺を調べてみると日陰気味で木漏れ日が差す道路沿いを緩やかに飛翔する数頭の雄を確認することができました。同時に少数の雌も見られましたが、その中に

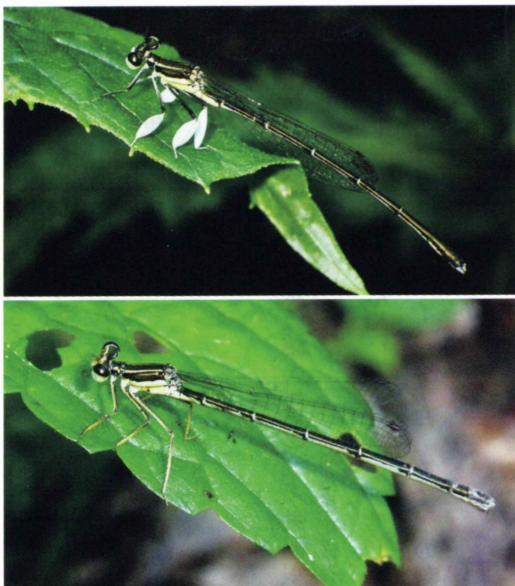


写真1 チョウセンゲンバイトンボ



写真2 発生地の環境の様子

脚と頭部背面が赤い個体が混じっていました。その時はテネラル（羽化直後の成虫）なのかなと思ったのですがどうしても気になってしかたがありません。そこで、昆虫写真家で「ネイチャーガイド 日本」のトンボ」（文一総合出版）の著者である尾園暁さんに生態写真と共に頭部及び腹部末端を含んだ標本画像を送り見解を求めました。尾園さんは二橋亮さん（産業技術総合研究所）の協力の下、形態の精査およびDNA解析を行い、日本では初めての発見となるチョウセンゲンバイトンボであることが判明しました。

チョウセンゲンバイトンボは朝鮮半島から中国、極東ロシアまで分布しています。日本本土にいるゲンバイトンボより一回り小さく、雄の前・中脚附節（脚の先端節）が白いことで区別できます。和名の由来は写真のように雄の脚が軍配状に広がる特異な形をしていることに依ります（写真1）。

■生息地の探索

発見地の近くを調べると発生地はすぐに見つかりました。谷筋の細い溪流が貯水域に流れ込む境界及び樹林に囲まれた止水域でした。発生地の環境をもとに北部一帯を探索し上県町で二カ所、上対馬町で三カ所の生息地を確認しました(写真2)。

いずれの発生地も個体数も多く、生息環境も比較的安定しています。成虫は羽化後には発生地から少し離れた山道周辺で活動していることが多く、交尾個体も観察することができました(写真3)。今後は中・南部からの発見を期待しています。

■環境省による規制

発見から間を置かず環境省が動きました。翌二〇二二年五月、種の保存法に基づいてチョウセンゲンバイトンボを「緊急指定種」に指定しました。これは時限指定で指定から三年間、個体の捕獲・殺傷、販売、譲渡等が禁止されました。先に述べたように私的には喫緊の保護が必要な状態ではないと思っ



写真3 チョウセンゲンバイトンボの交尾

ていたので意外でした。

さらに今年二〇二五年二月、緊急指定種の解除を待たず、新たに「国内希少野生動植物種」に指定されました。これによって緊急指定種と同様の規制が継続されることになります。これらの規制前に作成した標本の一部を対馬博物館に寄贈していますので機会があればご覧ください。

タイワンシオヤトンボ

■亜種から種へ

本種も日本では対馬だけに生息するトンボで、朝鮮半島、台湾、中国、東南アジアに広く分布しています。長い間シオヤトンボの亜種として扱われてきましたが、最近の研究で胸部の黒紋や雌の腹部などの形態上の差だけでなくDNA解析でも明瞭に区別できることが分かりました。シオヤトンボとは古い時代に分離したと考えられることから種に昇格しました。

シオカラトンボに似ていますがふたまわりほど小さいトンボです。雌は麦わら模様をしています(写真4)。

■悪化する生息環境

ヤゴで冬を越し、成虫は四月中旬頃から五月にかけて見ることが出来ます。主な発生地は湿地で、多くは廃田跡地を利用しています。ただ近年、イノシシのヌタ場となって荒らされてしまったり、植物遷移によって植生が変わり干上がったたりして徐々に姿を消していく状況が確認されています。



写真4 タイワンシオヤトンボ

ここ数年、対馬では明らかにトンボの数が激減しました。生息環境の変化だけではなくいろいろな要因が複雑に絡んでいると考えられます。

例えば赤とんぼとして最も親しまれているアキアカネは夏季に避暑のため山地に移動し秋期に平地に戻ってきます。しかし温暖化によって対馬の山の標高では夏を越すのが厳しくなったのではないかとわれています。実際ここ数年アキアカネの姿を見ることができません。また、流水性のダビドサナエなど、なぜ減少したのか理由すら分からない事例もあります。

対馬の自然環境は悪化の一途をたどっています。身近な昆虫であるトンボの姿がいつまでも対馬の自然の中で見られるよう願うばかりです。